

スポーツクラブ人国記 (1)

柔道部編

柔道部は、創部明治33（西暦1900）年で、今年で創部113周年を迎える。平成25年3月まで合計560名の卒業生を輩出している。

また、西暦1900年と言えば、清国で北清事変（義和団の乱を鎮めた事変）が発生し孫文が日本に亡命している。1896年にはアテネ五輪（第1回夏季オリンピック）が開催され、1901年にはノーベル賞が創設され、1902年には日英同盟が締結されている。国際化の流れが垣間見られる時代である。

創部113周年といえば、かなりの期間になるため便宜的に、戦前（昭和20年8月15日まで）、と戦後（昭和20年8月16日以降）に分けて考えたい。

△戦前▽

これまで記録が残っている卒業生のトップバッターとして登場するのが、昭和3年高商卒の倉田定雄だ。倉田は丸善石油に入社後、一貫して営業畑を歩き副社長で退任した。昭和37年6月30日発行の「清光」第6号に倉田からの寄稿があり、その中で東京オリンピックの基本方針として体重制の階級区

分を三階級（68キロ以下、69キロから80キロまで、81キロ以上）と無差別とすることが決定されたと報じている。

なお、倉田は柔道オリンピック審議会の審議員に選ばれており、審議員には永野重雄、三船久三等錚々たるメンバーが名を連ねていた。倉田は清光会（柔道部OB会）の初代会長も務め、内外共に柔道部の充実に尽力した功労者である。

昭和4年高商卒の瀬川美能留は、野村証券に入社して営業力を発揮し、昭和34年社長就任、昭和41年には調査部を独立させ野村総合研究所を設立した。積極営業で同社を業界首位に導いた。昭和43年会長、昭和53年相談役を歴任し、この間に初代日本証券業協会連合会会長にも就任した。昭和55年に本学証券関係講座の充実および学術奨励のための資金として3億円相当の有価証券を明年1月に寄付する目録を、大阪市長に手交した。著書に「私の証券昭和史」。昭和45年4月に日経新聞の「私の履歴書」執筆。なお、瀬川は巨人ファンで知られており巨人の財界応援グループ「無名会」の副会長も務

めた。

ここで、柔道部の対外試合についての歴史を紐解く。三商大戦は昭和4年の神戸高商の大学昇格を期に昭和6年に三商柔道連盟が発足し、昭和6年から開催場所は持ち回りで毎年3日間開催となった。第8回大会の昭和13年は水害により中止を余儀なくされ、昭和18年の第13回大会以降は第二次世界大戦の激化により無期延期となった。そして、戦後昭和28年11月23日に旧三商大戦（15人戦の抜き試合）として復活し、現在に至っている。その他の対外試合としては、昭和26年に関西学生柔道連盟が発足し、毎年関西学生柔道優勝大会が開催されるようになった。関西全体としての大会が開催されるようになり、他のスポーツと同様、関西柔道界も組織化され統一された。

しかし、強豪ひしめく関西学生柔道優勝大会のなかでは、我が柔道部が活躍することは困難であり、存在環境が似た旧三商大戦での勝利を最大の目標とするようになった。

話を戻す。昭和9年学部卒の金山薫は、大学入学時参段の腕前でその年の7月に四段に昇段した。満州鉄道入社後も柔道を続け、本土と満州の対抗戦に満州代表として出場した。おそらく、現在の全日本選手権出場乃至それに準

ずるクラスの強豪であったと想定される。金山は第5代清光会会長も務めた。昭和10年学部卒の狭間源三は、卒業後本学経済研究所教授となり昭和40年から経済研究所所長を4年半務めた。また、第7代清光会会長も務めた。



広瀬徹師範の八段昇段祝賀会
左から広瀬師範1人おいて中馬馨元大阪市長

△戦後▽

戦後のトップバッターとして登場するのが、昭和28年学部卒の中小路昭二だ。中小路は学生時代学生運動でも名を馳せたが、卒業後は昭和30年に大和ハウス工業に入社し、昭和45年専務に昇格した。その後、昭和60年に大和ビルド社長に就任し、平成7年に退任した。中小路は、東京勤務が長く2代目の東京支部長として東京地区OB会を纏め、東京地区の中心的存在であった。

学生時代に旧三商大戦の復活に尽力し、昭和27年11月23日に一橋大学で旧三商大戦が開催されたが、神戸大学が欠席となり幻の旧三商大戦となった。

昭和32年文学部卒の中村文雄は、学生時代に関西学生柔道界で活躍し個人戦でベスト4の実績を残している。各大学1名の出場選手でのベスト4は特筆すべき戦績である。

昭和33年法卒の中村健一は大日本印刷に入社し、営業畑で力量を發揮した。昭和61年に取締役商印（商業印刷物）事業部長に昇格し、平成元年常務、平成8年専務（商印、建材、包装担当）となり平成17年退任した。専務在任9年と長く大日本印刷の大番頭としての大役を果たした。

昭和35年医卒の広橋賢次は、本学大学院に進学し昭和40年には医学博士号取得。その後本学医学部整形外科助手・講師を経て、昭和62年鹿屋体育大学教授に就任した。スポーツ医学の草分け的な存在であった。その後平成8年に大阪体育大学に移り、平成17年森ノ宮医療大学学長に就任した。4年間の学長期間を経て平成23年に退任。現在、済生会中津病院の医師として週1回の診察を行う。広橋は大阪勤務時代に柔道部の専任医師的存在で、現役・OB会員の信認も厚い。また、平成11年か

ら第9代清光会会長を6年に亘って務めた。その他、関西学生柔道連盟理事、大阪府柔道連盟副会長等を歴任した。平成15年（2003年）大阪で開催された世界柔道選手権大会では医科学委員の代表を務め柔道界への貢献も大きい。平成25年1月七段を授与される。

昭和36年卒には、大曾根利彦と由利和久がいる。工・土木卒の大曾根は、近畿日本鉄道に入社後、技術畑を歩き難波線開通に従事し大阪市交通局にも出向した。難波線開業に伴い近鉄に戻り昭和55年企画室部長、昭和63年事業局長等を歴任。平成元年伊勢志摩開発室次長として志摩スペイン村開発の現地担当となり平成10年まで単身赴任。平成6年志摩スペイン村が開業し専務取締役を兼任。平成7年参与として志摩スペイン村をフォロー。平成10年近鉄興業社長、OSK歌劇団社長に就任し、あやめ池遊園のリストラ、OSK歌劇団の清算など困難な仕事を成し遂げ平成15年退職した。

昭和36年経卒の由利和久は、蝶理に入社し包装関連市場向け機械の輸入を担当するなかで、この将来性に着目し、昭和51年機械の専門商社であるアルテックを設立し専務に就任。昭和63年社長に昇格、平成10年東証2部、平成12年念願の東証1部に上場を果たし、平

成15年に会長に就任した。平成19年に最高顧問となり平成22年退任した。また、平成17年から第10代清光会会長を務めた。東京在住のため、東京・大阪を度々往復してOB会・現役学生の活性化に向け尽力した。由利は、大学3年の時に広瀬巖師範（昭和16年日本選手権覇者、初代オリンピック強化委員長）より旧三商大戦優勝を要請され、心機一転練習に精を出し部員を引っ張って旧三商大戦優勝を目指した。卒業までに念願は叶わなかったが、昭和37年の旧三商大戦初優勝に繋がった。



昭和37年旧三商大戦初優勝

昭和38年商卒の小林賢三は、旧三商大戦優勝の悲願を実現すべく主将として部員を取りまとめ、猛練習の末昭和37年11月23日の旧三商大戦初優勝に導いた。当時部員が35名と多く、秋合宿は一次（全員）、二次（選手要員）に分けこなしたが、この層の厚さが大きな戦力となった。翌年の旧三商大戦は7名が卒業のため苦戦が予想されたが、昭和39年商卒の立野和彦は、主将として前評判を覆し見事に旧三商大戦2連覇を成し遂げた。この昭和37年、38年の連続優勝に欠かせない男がいる。小林と同期入学の昭和40年法卒の近藤健二だ。無茶苦茶な大学生活を自負する近藤は、6年間柔道に没頭し選手として昭和37年、38年の連続優勝に貢献した。そして、昭和38年の優勝時に一橋大学道場で胴上の栄誉に浴した。

なお、38年優勝時の主将立野は北野高校時代に主将として大阪府下柔道団体優勝を経験している。

上記の連続優勝には、もう一人欠かせない男がいる。昭和41年工・土木の石本亮介だ。若屋高校柔道部の主将として関西高校柔道界でも活躍した逸物だ。大学1年の時に大阪府下大学の個人戦二段の部で優勝し、各種大会でも新人離れした活躍を見せ、連続優勝にも出色の戦績を残した。主将であった

昭和40年の旧三商大戦では珍しい三すくみの3大学優勝に漕ぎ付けた。

石本の1年後輩に石本と同じく芦屋高校柔道部の主将を務めた昭和42年商卒の平松磐城がいる。平松は卒後野村貿易に入社し、繊維部門の営業で活躍し組合委員長も務めた。その後化成品部門に移り将来を嘱望され取締役にも内定していた。しかし、がんの再発が発覚し平成10年53歳の若さで夭折したことは大いに悔やまれる。



胴上げされる近藤健二（一橋大学柔道場にて）

昭和43年工・土木卒の北田俊行は、大学3年の関西学生柔道優勝大会（団体戦）の関学大戦で左足筋の部分断裂により選手生命を断たれる。以降勉学に励み本学大学院工学研究科修士課程

終了後、昭和45年大阪大学大学院工学研究科博士課程に進んだ。昭和48年4月大阪大学工学部土木学科助手、昭和53年4月本学工学部土木学科講師、昭和56年10月助教、平成11年4月教授を歴任し、昭和55年には工学博士を取得。橋梁工学が専門で土木関係の各種委員・委員長を歴任。本学教授時代は、柔道部部长を長年にわたり引き受け、新入部員獲得等学生支援に注力した。

昭和44年経卒の杏中保夫は、野村証券に入社し営業部門で頭角を現し、昭和63年戦後生まれ初の取締役に就任。平成6年常務に昇格したが、三洋証券再建のため三洋証券に移り専務として再建に奮闘し、年300億の赤字から単月の黒字に改善した。平成8年闘病中の親友・公文毅の要請で公文教育研究会の筆頭副社長に就任、翌年社長に昇格。10年間社長の任にあり、その間公文を世界ブランドの「KUMON」に育てる。平成19年に相談役も退く。平成22年シャノンマーレ化粧品取締役最高顧問に就任し現在に至る。

昭和45年卒では商卒の日尾野敏邦と高井正志がいる。日尾野は入学時から公認会計士を目指していたが、柔道での肩の骨折を機に怪我が多くなったこともあり昭和43年秋から休部して本格的に公認会計士を目指した。その甲斐

あって、昭和45年大学卒業後の公認会計士試験に合格し、その後故郷の名古屋を中心に営業を展開。着実な性格が功を奏し、平成12年に8階建の自社ビルを立てたが、平成18年にくも膜下出血を患い63歳で帰らぬ人となる。

高井は卒業後積水化学工業に入社し、総務・労務・人事畑を歩む。総務部長時代に女子陸上部の部長を任せられる。当時の積水化学工業の女子陸上部には小出監督率いる高橋尚子ら有力選手がいた。平成12年のシドニーオリンピックでは高橋尚子選手が女子マラソンで初優勝し高井もシドニーに随行した。高井はその後持ち前の手堅さを買われ監査役に昇格。6年間の監査役を無事こなし平成23年に退任した。

昭和50年卒には法卒の木村真敏と正殿博章がいる。木村は高校時代にはラグビー部に所属していたが、大学時代に柔道に転向した。木村は昭和50年に卒業したが、弁護士を目指して勉強を続け昭和54年に司法試験に合格した。柔道への転向を含め文武両道を貫いた。昭和57年3月に司法修習を修了し、

昭和60年4月に独立して現在に至る。木村はOB会の幹事長も経験し、現在副会長の任にある。（新地通いで？）一時体調を壊したが、摂生に努め現在は健康を回復している。

正殿は日本生命に入社し、長年労働組合の仕事に携わり組合委員長も務めた。その後営業職に転じ平成18年に執行役員に昇格。常務執行役員近畿営業本部長時代には、本学の現代保険論（日本生命提供講座）の講師も務めた。平成24年3月に専務執行役員を退任し、平成24年6月よりニッセイ保険エイジェンシー（株）の社長に就任し現在に至る。また、日本生命の柔道部監督、西日本実業柔道連盟の役員も務め、柔道界に貢献している。

最後に若手を紹介する。平成21年法卒の松浦加代子と平成22年法卒の沼田晃一だ。松浦は卒業後本学法科大学院に進み、平成23年の司法試験に合格。現在は小田原で弁護士活動を展開している。沼田は卒業後京都大学法科大学院に進み、平成24年の司法試験に合格。現在は裁判官を目指して司法修習中である。柔道部としては、2年連続して司法試験合格者を輩出するという快挙を成し遂げたことになる。松浦は女子柔道のエースとして各種大会で活躍し、柔道部の副主将も務めた。沼田もレギュラー選手として各種大会で活躍し、久しぶりの平成21年の旧三商大戦優勝にも貢献した。

（山本孝記）